

古墳時代後期・終末期の神奈川

藤沢市役所 郷土歴史課 松坂悟

1. 古墳時代後期・終末期について
2. 横穴式石室と黄泉国神話
3. 神奈川の様相

○用語

【横穴式石室】古墳に埋設された遺骸埋葬施設のうち、一方の側面が外部に通じて出入口となっているものの総称。追葬することが可能になる。

【横穴墓】丘陵斜面や崖面に横穴を掘り、死者を埋葬する墓で、横穴式石室などの横穴系埋葬施設の影響を受けて、5世紀代に九州北部で造られ始めた。

【継体大王】430? - 531? 6世紀前半の大王。安閑・宣化・欽明の父。継承者のいなかった武烈のあと、応神五世孫というオホド王が大伴金村によって越前の地から呼ばれ、大王の位に就いたとされる。その墓が、それまで王墓・大王陵がまったく営まれなかった淀川水系の摂津三島の地に造営されることが注目される。

【モガリ】人が亡くなってから一定の期間、埋葬場所以外で遺体をいったん安置し、死者の復活を願いつつ「死」を確認すること。

【^{くにどみなかわら}国富中村古墳】出雲平野東北部に位置する約30mの円墳で、地域でも大型の横穴式石室を有する。築造時期は6世紀末から7世紀初頭頃。未盗掘であり、再生阻止儀礼の確認が古墳時代の葬送儀礼研究において大きな成果となっている。

【^{はざいけこふん}葉佐池古墳】愛媛県松山市にある長さ41m幅23mの楕円形墳で未盗掘であった。一号石室は6世紀後半に築造され、7世紀初頭まで追葬に用いられた。被葬者にはハエの^{いようかく}囲蛹殻が多量に付着していた。ハエは暗闇では活動しないので、卵を産み付けられたのは、ある程度光量があって出入り可能な密閉されていない空間ということになり、モガリの事例として注目される。2号石室は6世紀中頃から築造され、人為的な破壊の痕跡が石室内で検出されている。

1 古墳時代後期・終末期について

(1)導入

古墳時代前期から中期にかけて、各地に地域的な首長連合が形成されていた。ヤマト王権も畿内南部の地域的首長連合と考えられる。こうした各地の地域連合が複合的、重層的に重なり合って構成されていたのがヤマト政権と呼ばれる汎列島の首長連合といえる。しかし、中期後半の5世紀後半になるとこうした首長連合は急速に解体していったようで、5世紀後半以降には、墳丘長150m以上の前方後円墳は畿内以外の地域では全く見られなくなってしまふ。

(2)古墳時代後期と終末期

5世紀末～6世紀末。古墳時代後期には横穴式石室が九州以外の近畿地方などでも使用されるようになり、群集墳が出現、後期後半には各地に横穴式石室を埋葬施設とするものが見られる。また、6世紀末以降、前方後円墳の造営が終わり、それ以降が終末期とされる。

(3)横穴式石室

横穴式石室は後期古墳を代表する要素として、その登場が時期区分の指標となっている。しかし北部九州では4世紀代に導入されており、それだけでは後期古墳の特徴とは言えない。その意味では畿内で6世紀初頭に成立した畿内系石室が横穴式石室の汎列島の普及をもたらす契機となった。

(4)継体大王

6世紀前半頃の大王。今城塚古墳（真の継体陵とされる）は同時期では最大規模の前方後円墳である。また主体部は横穴式石室であると推定され、今のところ、大王墓で横穴式石室を採用した最古の例である。

また、6世紀初頭ごろ、例外的に規模の大きな、名古屋市断夫山古墳（150m。継体を擁立した尾張連草香の墓とされる）と八女市岩戸山古墳（138m。磐井の墓とされる）が造られていることが、継体大王の時代を考える上で注目される。

(5)前方後円墳から大型方墳・円墳へ

五条野丸山古墳（欽明陵とされる）を最後に巨大な古墳の造営は終わる。以後、それまで前方後円墳を造営していた大王や有力首長たちは大型の方墳・円墳を造営するようになる。

(6)終末期古墳

蘇我馬子の墓と伝わる石舞台古墳のように巨石を用いた巨大な石室は造られなくなり、切石を使用した精緻な石室が造られるようになる。また、終末期の大王陵には八角形墳が採用されるようになる。

2 横穴式石室と黄泉国神話

研究史

●ヨモツヘグイ

小林行雄は黄泉国神話に現れる「黄泉戸喫」に着目した。^{ヨモツヘグイ}(黄泉戸喫はイザナミが黄泉の国で飲食をしてしまったため、現世には帰れないと告げる部分)これを横穴式石室から出土するミニチュア竈と関連させ、墓前炊飯と共同飲食が「黄泉戸喫」の実態であると推論し、その機能が生者と死者の厳重な区別にあるとした。(小林 1949・1965)

●コトドワタシ

白石太一郎は神話の「コトドワタシ」に着目した。白石はこの神話の内容と横穴式石室の閉塞施設における儀礼とを対比し、両者が対応するものであるとした。そして、後期古墳における葬送儀礼の要素が、「黄泉戸喫」としての墓室内食物供献、「黄泉比良坂」における呪的逃走に対応する石室からの脱出、および石室の閉塞とそれに伴う儀礼による死者との別離の宣告(コトドワタシ)であると論じた。(白石 1975)

●人骨からのアプローチ

田中良之はこれまでの研究は土器をはじめとした副葬品の存否や位置関係、扱われ方が主たる研究対象であり、墓の被葬者(人骨)について考慮する必要があるとして、5世紀後半の墓室内飲食物供献の事例を人骨の出土状況とともに検討した。供献は埋葬後数年をへて再度開口して行われ、その際に人骨の脚部を一部二次的に移動する行為があったこと、これらの行為が死の認定に関わる儀礼であり、5世紀後半に始まることを論じた。

イザナミは黄泉戸喫を行い、死者の世界の住人となってしまったが、追いかける力を有していた。つまり神話における死生観では肉体が腐敗してもヨモツヘグイのみでは完全な死を迎えてはいなかった(埋葬のみでは被葬者の死は完結せず)。

神話においてイザナミの死が完了するのは、コトドワタシによってである。それが閉塞儀礼であれば、追葬によって再度閉塞部を開口することは生者にとって危険なことである。従って死の完結には、黄泉の国の住人になるためのヨモツヘグイとともに、死霊の再生阻止儀礼が必要とされた。それが、飲食物供献と、人骨の二次的移動および脚部への飲食物供献であったと考えられる。(田中・村上 1994)

ここにその妹伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉國に追ひ往き。ここに殿の膝戸より出で向かへし時、伊邪那岐命、語らひ詔りたまひしく、「愛しき我が汝妹の命、吾と汝と作れる國、未だ作り竟へず。故、還るべし。」とのりたまひき。ここに伊邪那美命答へ白ししく、「悔しきかも、速く來すて。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき我が汝夫の命、入り來ませる事恐し故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。」とまをしき。かく白してその殿の内に還り入りし間、甚久しくて待ち難たまひき。故、左の御角髪に刺せる湯津津間櫛の男任一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまひし時、蛆たかれころきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八はしらの雷神成り居りき。

ここに伊邪那岐命、見長みて逃げ還る時、その妹伊邪那美命、「吾に辱見せつ。」と言ひて、すなはち黄泉醜女を遣はして追はしめき。ここに伊邪那岐命、黒御鬘を取りて投げ棄つれば、すなはち蒲生子生りき。こを振ひ食む間に、逃げ行くを、なほ追ひしかば、またその右の御角髪に刺せる湯津津間櫛を引き闕きて投げ棄つれば、すなはち笋生りき。こを抜き食む間に、逃げ行きき。且後には、その八はしらの雷神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。ここに御佩せる十拳劔を抜きて、後手に振きつつ逃げ來るを、なほ追ひて、黄泉比良坂の坂本に到りし時、その坂本にある桃子三箇を取りて、待ち撃ては、悉に逃げ返りき。ここに伊邪那岐命、その桃子に告りたまひしく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中國にあらゆる現しき青人草の、

6 黄泉の国



一地下にある死者の住む國で、穢れた所とされている。二家の閉ざした戸口。古墳の入口が連想された。三物語の筋から言えば「生める」とあるべき所。四黄泉の國の産で煮炊きした物を食ふること。これを食ふとその國の者になりきると信じられていた。五いとしいわが夫。汝夫は男を親しんでいう語。六髪を左右に分けて耳のところで結いわがねた古代男子の髪形。七歯の多い爪形の櫛の意であらう。八櫛の両端にある太い歯。九書紀に「夜忌一片之火」とあるから、タブーを犯したのである。一〇蛆虫が集まり声がむせびふさがつて。

一黄泉の國の醜い女。死の穢れの擬人化。二もとは葦草を輪にして髪の上ののせ、長寿をねがったもの。三細櫛の突。四竹の子。鬘を投げると葡萄の実。櫛を投げると竹の子が生じたという話は、類似呪術に基づいた話。五黄泉の國の軍上。悪霊邪鬼の擬人化。六うしろ手で振りながら。後手で物をするのは相手を呪う行為。七黄泉の國と現実の世界との境界。八桃の実が悪霊邪鬼をはらうという中国思想に基づいている。九高天の原並びに黄泉の國に対する現実象。一〇この世の人々。

苦しき瀬に落ちて思ひ惚む時、助けべし。」と告りて、名を賜ひて意富加牟豆美命と號ひき。最後にその妹伊邪那美命、身自ら追ひ來たりき。ここに千引の石をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石を中に置きて、各對ひ立ちて、事戸を度す時、伊邪那美命言ひしく、「愛しき我が汝夫の命、かく爲ば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さむ。」といひき。ここに伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が汝妹の命、汝然爲ば、吾一日に千五百の産屋立てむ。」とのりたまひき。こをもちて一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まるるなり。故、その伊邪那美命を號けて黄泉津大神と謂ふ。また云はく、その追ひしきしをもちて、道敷大神と號くといふ。またその黄泉の坂に塞りし石は、道反之大神と號け、また塞ります黄泉戸大神とも謂ふ。故、その謂はゆる黄泉比良坂は、今、出雲國の伊賦夜坂と謂ふ。

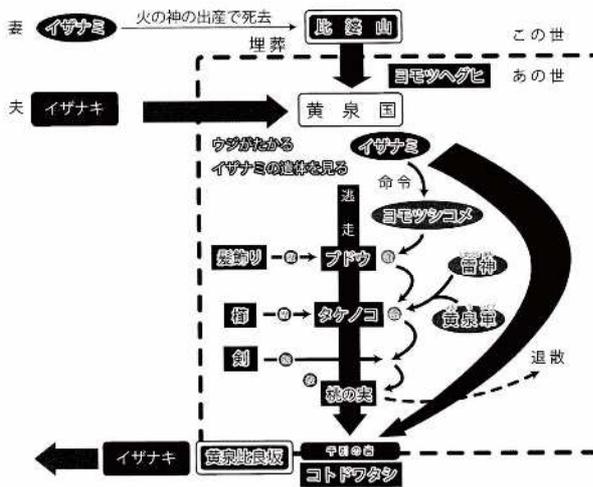


図2 黄泉国訪問神話ストーリー

一語義未詳。二千人もかかって引くほどの大きな岩石。岩石は悪霊邪鬼の侵入を防ぐものと信じられていた。三書紀には「建絶表之誓」とある。離別を言い渡す。四産婦を隔離するために別に立てられた小屋。産屋を立てるといふのは子を生むという意。五人の生と死の起原を説明するのが本義の神話。六追いついたので。七道を追いついた意にとつて。八道から追いかえたの意。九所在不明。出雲風土記出雲郡宇賀郷の条に、北の海浜に窟戸があり、窟内に人の入れない穴がある。夢に窟の辺に行くと見れば必

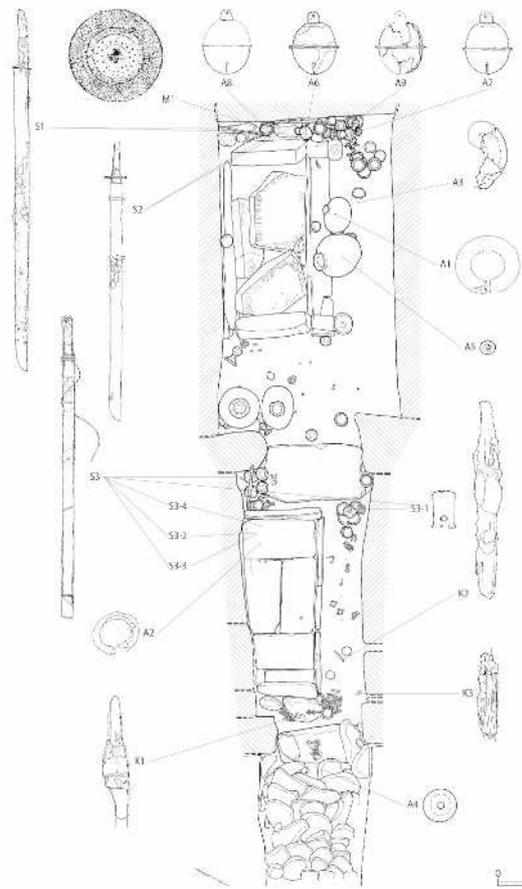


図3 鏡・装身具・大刀・刀子出土状況

国富中村古墳

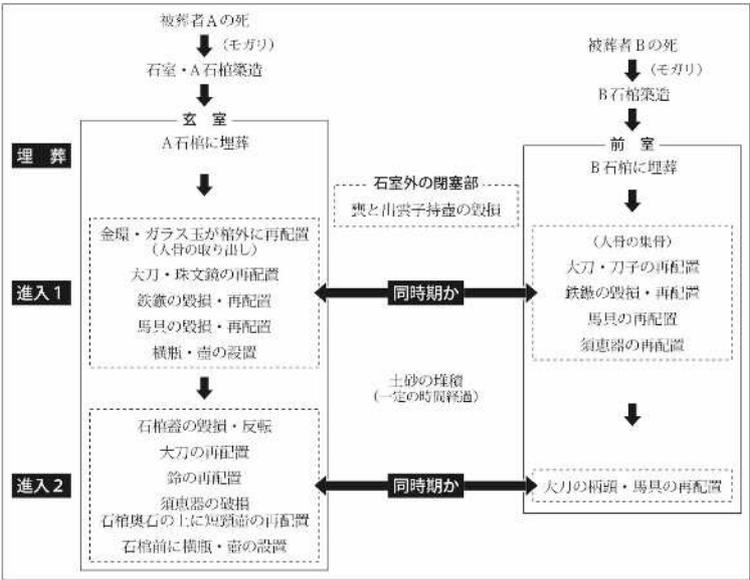
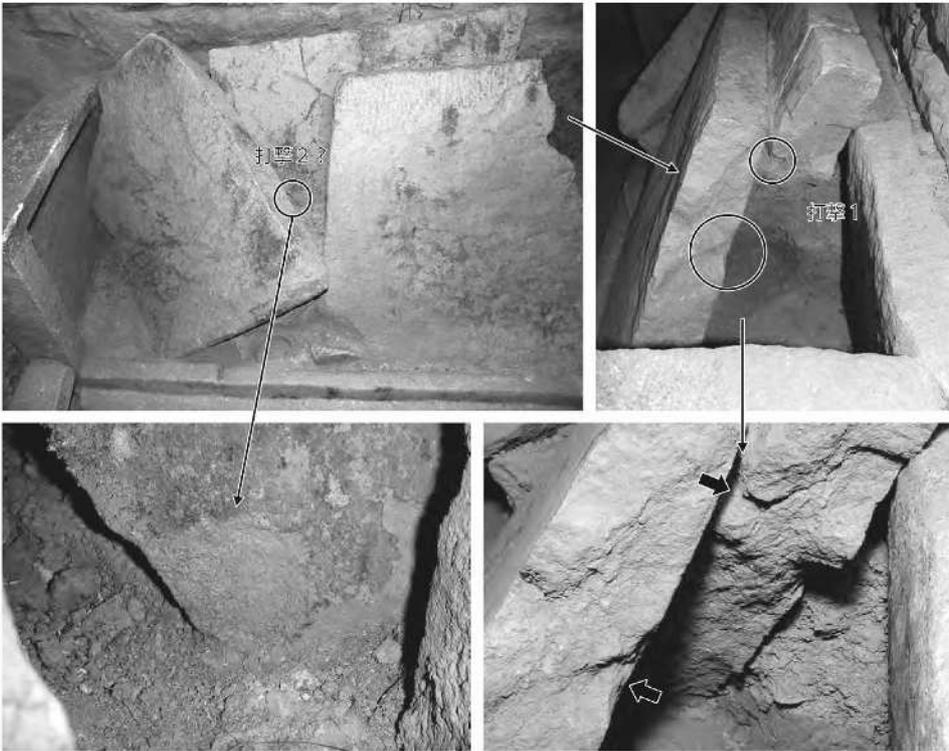


図4 国富中村古墳の葬送儀礼



蓋石破片b表の剥離痕 打撃1の痕跡 (蓋石破片bと蓋石破片c)

図5 石棺蓋の打撃痕跡

3 神奈川の様相

(1)古墳時代後期以前

相模や南武蔵では中期前半東京都野毛大塚古墳、前期後半長柄桜山古墳1・2号墳、海老名市瓢箪塚古墳等などで大型古墳の造営が終わる。この背景として、畿内から東方への主要ルートの変化が指摘されている。

(2)武蔵地域の横穴式石室

武蔵地域で再び有力首長墳が注目されるのは、終末期前半の多摩地域にある切石石室墳である。8世紀に国府が成立し、武蔵が東山道から東海道に変更されるさきがけを思わせる。

(3)相模地域の横穴式石室

相模地域の後期後半から終末期では、川原石両袖・片袖石室が有力首長墳に採用される。また後期後半から急増する小型円墳などの多くには無袖石室である。

(4)その他の墓

6世紀後半から7世紀代を中心に横穴墓が各地に爆発的に造られるようになります。神奈川県内でも大磯丘陵一帯、藤沢・鎌倉・逗子・横浜市栄区等一帯、三浦半島東京湾岸沿い、多摩丘陵南端部などに数多く造られる。

また竪穴系の小石室や横須賀市かろうと山古墳のように切石組合せ箱式石棺を主体部に採用した古墳、横穴式石室を主体部にもたない後期古墳（寒川町宮山中里遺跡5号墳のように前方後円墳なども見られる）など古墳時代後期から終末期の墓制は横穴式石室以外にも多様に展開している。

(5)古墳時代から古代へ

古墳時代終末期と重なる時期に、郡家などの古代集落に関連する遺跡が各所で調査されている。武蔵では東京都北区御殿前遺跡、川崎市橘樹官衙遺跡群、横浜市長者原遺跡などが7世紀後半から末に成立。相模では茅ヶ崎市下寺尾官衙遺跡群をはじめ、厚木市御屋敷添遺跡、海老名市本郷遺跡、藤沢市南鍛冶山遺跡で7世紀後半から8世紀前半の大型建物跡の出現が発掘調査の成果から確認されている。

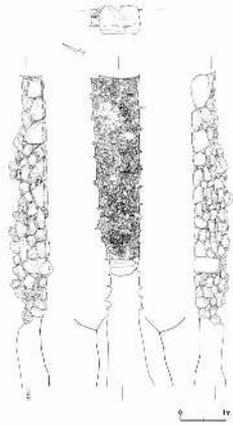


图10
三ノ宮・下谷戸7号墳
(伊勢原市)

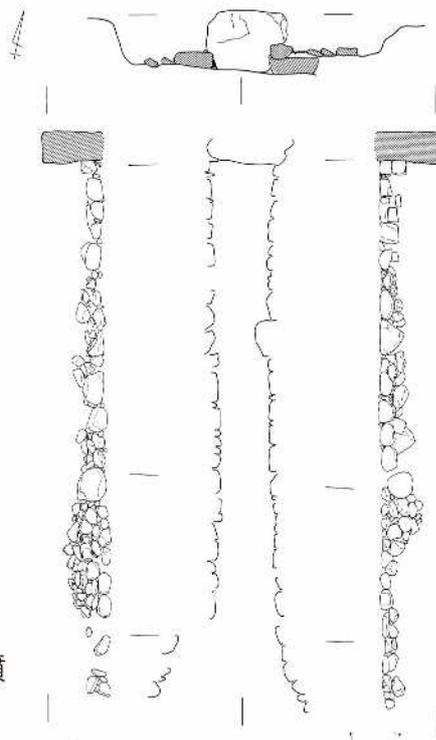


图11 三ノ宮3号墳
(伊勢原市)

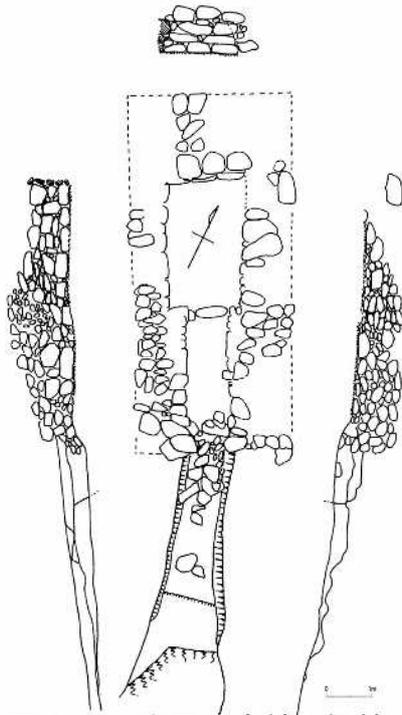


图12 登尾山古墳(伊勢原市)

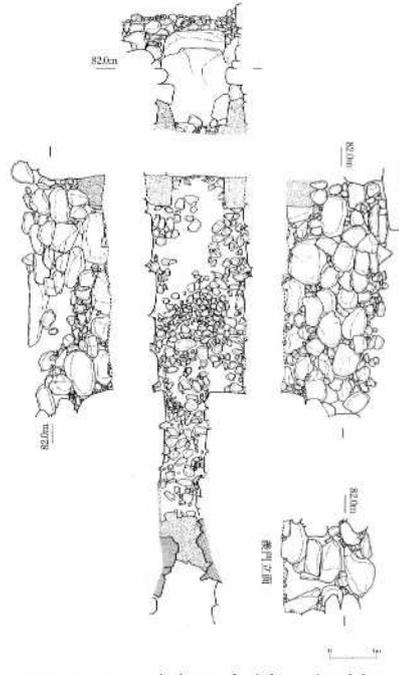


图13 埴面古墳(伊勢原市)

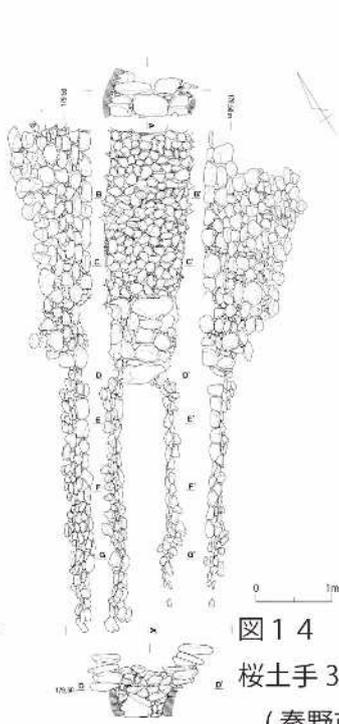


図14
桜土手 38号墳
(秦野市)

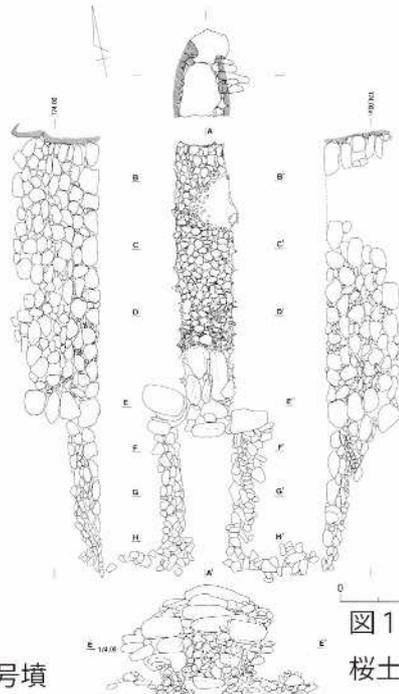


図15
桜土手 25号墳
(秦野市)

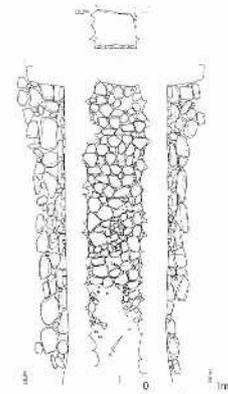


図16 総世寺裏古墳
(小田原市)

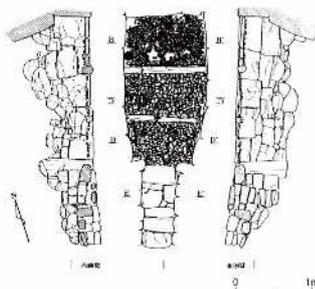


図17 赤田 2号墳
(横浜市)

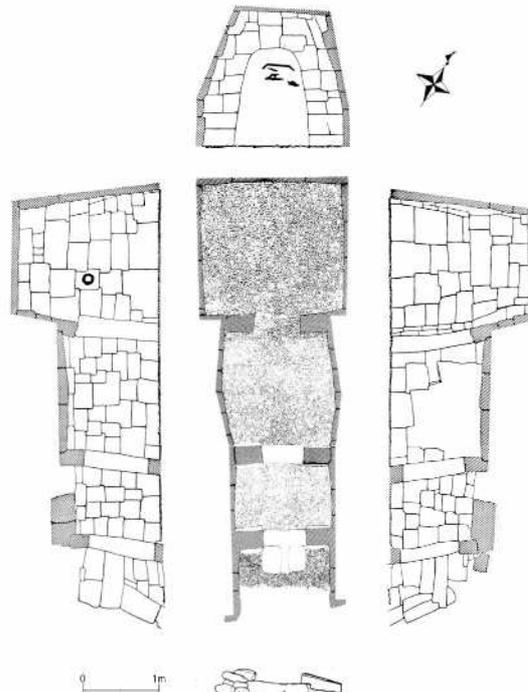


図19
馬絹古墳(川崎市)

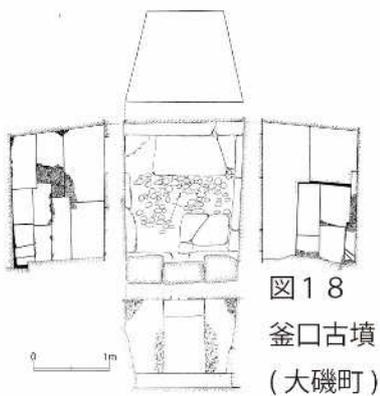


図18
釜口古墳
(大磯町)

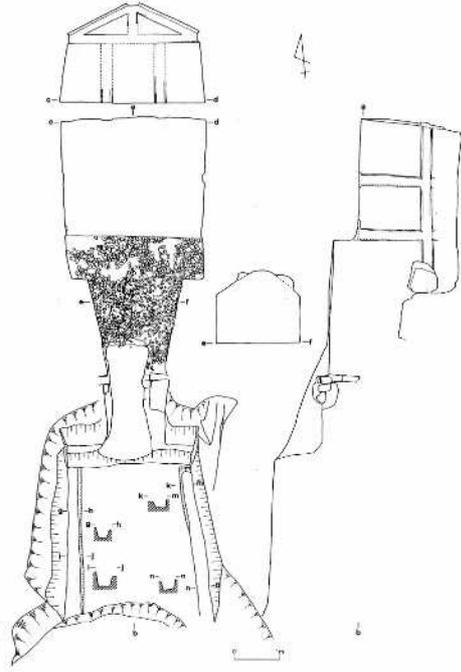


图 2 0 茱子田横穴 (横浜市)



图 2 1 川名新林右横穴墓群 2 号墓
(藤沢市)

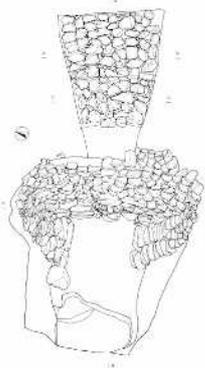


图 2 2
三ノ宮・下尾崎遺跡 23 号墓
(伊勢原市)

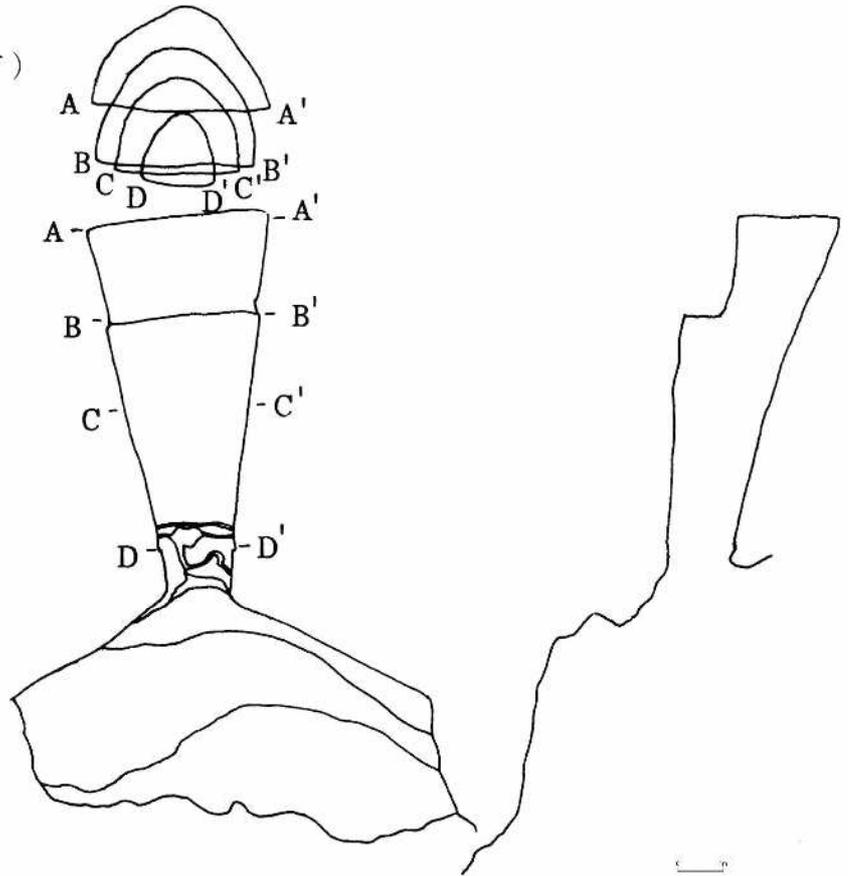


图 2 3 藤沢市No.199 遺跡

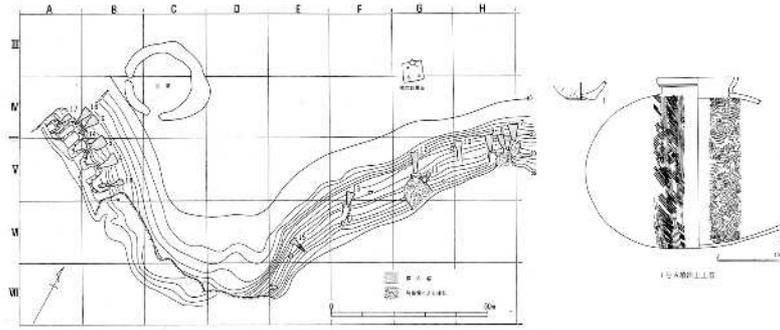


図24 代官山遺跡(藤沢市)



図25 宮山中里遺跡5号墳(寒川町)

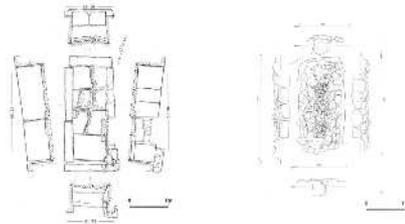


図26 かろうと山古墳 図27 長谷小路周辺遺跡
(横須賀市) (鎌倉市)

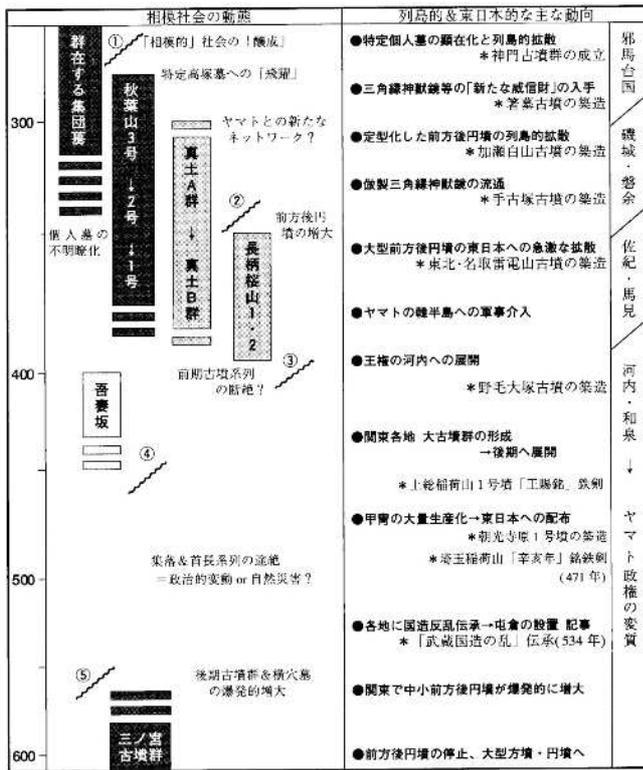


図28 古墳時代「相模社会の枠組み」の変質模式図

水系	流域	遺跡名	古墳時代前期		古墳時代中期		古墳時代後期		備考
			前期	後半	前期	後半	前期	後半	
北	流	写命							
	流	香内和野							
	流	香取山ノ上							
	流	いづみ野							
	流	熊鷹野前ヶ谷							横穴墓
	流	古野							
	流	No.431							
	流	白旗川							
	流	御前山							
	流	香取山							古墳
中	流	用名森久							古墳
	流	片瀬宮前							
	流	用名清水							
	流	古野大塚							古墳
	流	No.265							古墳
	流	深田山							横穴墓
	流	宮前河内							
	流	手武八反目							横穴墓
	流	伏見川							古墳・横穴墓
	流	下ノ野							古墳
南	流	石川海神山							
	流	稲荷山C・D・F							
	流	稲荷山東麓							
	流	稲荷山石原谷							
	流	海ノ宮							
	流	大塚山							
	流	大塚山							
	流	大塚山							
	流	西郷212							
	流	熊鷹野ヶ谷							
その他	—	十二天							
	—	二云寺							
	—	坂内							
	—	坂内 SFC							
—	早田集落前								
—	早田大塚								

図29 藤沢市域の古墳時代集落消長

引用

図 1 (倉野 1963) 図 2 (出雲弥生の森博物館 2012) 図 3~5・10~12・14~27 (各発掘調査報告書より引用)
図 6~7 (栗田 2015) 図 8~9 (出雲弥生の森博物館 2012・写真引用元は松山市考古館) 図 13 (田尾 2007)
図 28 (西川 2007) 図 29 (田尾 2014)

参考文献 (発掘調査報告書は掲載を割愛)

- 井上光貞 1973 『日本の歴史 1 神話から歴史へ』 中公文庫
岩波書店 1999 『岩波 日本史辞典』
内山敏行 2012 「各地の古墳 X 関東」 『古墳時代研究の現状と課題』 上 土生田純之・亀田修一編 同成社
草野潤平 2016 『東国古墳の終焉と横穴式石室』 雄山閣
倉野憲司 1963 『古事記』 岩波文庫 2007 改訂版
栗田茂敏 2015 『黄泉の国の光景・葉佐池古墳』 シリーズ「遺跡を学ぶ」 103 新泉社
小林孝秀 2014 『横穴式石室と東国社会の原像』 雄山閣
小林行雄 1949 「黄泉戸喫」 『考古学集刊』 2
小林行雄 1965 『古墳文化論考』 平凡社
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 1994 『日本書紀 (一)』 文庫版 岩波文庫
白石太一郎 1975 「ことどわたし考」 『橿原考古学研究所論集創立三五周年記念』 吉川弘文館
白石太一郎 2013 『古墳から見た倭国の形成と展開』 日本歴史私の最新講義 07 敬文舎
白石太一郎 2018 『古墳の被葬者を推理する』 中公叢書
鈴木靖民 2014 『相模の古代史』 高志出版
田尾誠敏 2007 「相模 登尾山古墳・埴面古墳」 『武蔵と相模の古墳』 季刊考古学・別冊 15 広瀬和雄・池上悟編 雄山閣
田尾誠敏 2014 「II 章古墳時代のムラと暮らし」 『大地に刻まれた藤沢の歴史』 IV 藤沢市
田中良之・村上久和 1994 「墓室内飲食物供献と死の認定」 『九州文化史研究所紀要』 39
田中良之 2017 『骨からみた古代日本の親族・儀礼・社会 - もう一人の田中良之 II - 』 すいれん舎
西川修一 2007 「相模の首長墓系列」 『武蔵と相模の古墳』 季刊考古学・別冊 15 広瀬和雄・池上悟編 雄山閣
土生田純之 1998 『黄泉国の成立』 学生社
土生田純之編 2010 『東日本の無袖横穴式石室』 雄山閣
土生田純之編 2013 『事典 墓の考古学』 吉川弘文館

展示会図録

- 出雲弥生の森博物館 2012 『「よみがえるな！」 - 国富中村古墳のお葬式 - 』
大阪府立近つ飛鳥博物館 2010 『継体大王の時代 百舌鳥・古市古墳群の終焉と新時代の幕開け』
神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課中村駐在所 (神奈川県埋蔵文化財センター) 編 2017 『平成 29 年度「かながわの遺跡」展 群集する古墳～神奈川の古墳時代終末期を考える』